



会員のひろば

キャリアウーマン

札幌市医師会
札幌緑愛病院 本多 利雄

「働く女性のために、もっといろいろな制度を作るべきなんだわ」

妻がテレビを見ながらつぶやきました。テレビの報道番組で、大企業の総合職について奮闘する女性の姿が放送されているのです。その女性は並の男性以上の業績をあげているキャリアウーマンのようですが、その一方で多忙な生活のために失うものも多いようです。

「この女の人、30歳を過ぎたばかりなのに1千万円も貯金があるんだって。でも忙しすぎて、結婚を考えていた男性とも別れちゃったって。この女の人のお母さんも心配でしょうね」と妻。

「女性のための制度を作れって言うけど、どんな制度を作れば良いんだろう？」

一緒にテレビを見ていた僕は、反論するわけではないのですが、でも尋ねずにはいられません。

「例えば出産の休暇が仕事上不利にならないようにしたり、便利な託児所を作ったりよ」

「結婚して子供を生んでも、男と対等に仕事ができるようにということかい」

ずいぶん欲張りなんだなあ…という言葉は飲み込んだのですが、その後つい余計なことを口にしてしまいました。

「女ひとりでこんなに無理して働いていたら、いつか体を壊すんじゃないか。男ならこのくらいの年齢になれば普通はもう結婚しているし、奥さんがいれば体にも気を使ってくれるだろうけれど、女ひとりではそうもいかないだろうしなあ」

「それは社会が男性中心にできてるからよ。だ

から女でも安心して働ける社会を作るべきなのよ」

妻は僕の言葉が少し気に障ったようです。いつもこの問題では僕らの意見は一致しないのです。こんなときは少し矛先をかわすのが賢明です。「家庭における女性の役割だって、とても重要だと思うな。家事や子育ては大変だし、それに夫の世話もしなければならぬ。そのおかげで男は外で働いてどんなに疲れても家に帰れば妻や子に癒されるし、そんな妻子のためにまた働く意欲も湧いてくるんだから」

「それは家事や育児といっても、簡単なものではないんだけど」

専業主婦の妻は、自分の立場を言われると弱いです。でもそれだけではいけないというのが持論です。

「女性が社会に出て働くのが、そんなに大事なことかな。職場で出世したいのだろうか、それともお金が欲しいのかな」と僕。

「それもあるかもしれないけれど、それより生きがいよ。男性と同等の仕事ができるのに、それをさせてもらえないなんて、虚しくなっちゃうわ。だって学生のときは、私より成績の悪い男性もたくさんいたのよ。それなのに社会に出れば男というだけで評価されて、女は添え物みたいな扱いなのよ。女だって仕事ができることを認めてもらいたいわ」

妻は過去の自分の職場のことを思い出しているようです。でもそれは性差というより個々の能力の差なんでは…という言葉はかろうじて飲み込みました。

「社会に出て仕事をするのが生きがいのすべてというの、なにか変だなあ。人の生きがいってもっと別のところにもあるんじゃないのかな」

「そうね、今は子供を育てるのが私の生きがいだわ」と妻もようやく少し納得したようです。

そうなんです。女性にとって生きがいは、仕事より子育てのはずなんです。



「ヒト」以外の生物は、自分の子孫を残すことに一生懸命です。ほとんどの生物は生殖のためにその一生涯を過ごすといっても良いのではないのでしょうか。そうすることで、か弱そうに見える生き物も、何万年とも知れぬ長い間その「種」を保ってきたのです。そうでなければすぐに絶滅してしまったはずですよ。

いくつかの「進化」した生物は社会を作ります。でもその社会というの、生存や生殖に有利だからこそできたはずですよ。どんな生物にとっても自分の子孫を残す、自分の遺伝子を伝えることが生きる最大の目的だからです。

人の作る社会だって、少なくとも原始人の頃はそうだったはずですよ。人の子供は産まれてから成熟するまで、生物のなかでは例外的なほど長期間を必要とします。立って歩くだけでも1年、親から自立するのに10年近くもかかるのです。そんな幼児を女だけで、しかも同時に何人も育てるのは難しいことだったのでしょう。それで遺伝子を提供した男たちは協同して社会を作り、狩をしたり敵と戦ったりして女と子供を守ったのです。そうやって原始の人は子孫を残してきたのです。

でも文明が高度に発展した現代、人の数は異常

なほど増えすぎてしまいました。そして今の人の社会は、女や子供を守るはずだった社会からずいぶん離れたものになっています。そして現在の人の姿は、子孫を残すために生涯を費やすほかの生物と同じには見えません。いまや人は、この異様に膨れ上がった「社会」そのものを守るために働いているようにしか見えないのです。

子供を産みながらいない女や、男と同じように社会で働きたがる女が増えてきたのは、人が子孫を残そうとする本能を失いはじめた前兆なのではないでしょうか。

しかし自然界では数が増えすぎてしまった生物は、自らその数を減らして種の保存を計るといいます。もしかしたら異常なまでに増えすぎてしまった今の人類は、絶滅を避けるために自らの数を減らす道を歩みだしているのかもしれない。



「女性も子供など生まないで、男性とまったく同じように働いたほうが良いのかもしれないな。もちろん子を産む女も少しは必要だけれど」

「そうよね、女性も男性と同じ権利を持つべきなんだわ」

妻の主張は今の人類の状態にかなったものなのかもしれません。もしそうならば、その自然の摂理に逆らうべきではないのかもしれないな、僕はそう思いながらまたテレビに目を向けました。

爪白癬

空知医師会 徳倉 昂

右足の第一指の爪が、いつのまにか白くなって肥厚していた。そして数年がすぎた。いずれ内服薬でと考えていたが、ある日ふと思いついて、皮ふにやる密封療法は…と考えてやってみた。(平成15年7月頃)

白く肥厚した先端部分を爪切りで切りその断端に外用薬を塗って、ビニール袋の角を利用してかぶせる。そして靴下をはいて固定する。夜床に入

る時も。そして軟化して軟かくなった断端を爪切りで切り、同じことを繰り返してゆく。爪のない爪床が段々多くなり、しばらくすると、新しく爪が出てくるが、白癬ではなく、きれいである。内服をしなくても治る目途がついた。軟膏でもクリームでもいいようです。白癬菌は顕微鏡でたしかめている。



性差医療と女性外来

旭川市医師会 前川 勲
医療法人修彰会沼崎病院

「女性外来」に関するニュースが賑やかである。「うちの病院には、女性外来があります」ということが病院の目玉になりつつある。

なんとなく腑に落ちない思いをしているのは、私だけだろうか。

この問題に対して誰かが意見を述べてはくれないだろうか、と期待していたのだが誰も書いてはくれないようなので、雑駁ではあるが私の疑問を書いてみることにする。

まず誤解を避けるために、言葉の意味を述べることにする。ここで用いている医学 (medical science) とは主として医科学的な事象を指し、医療 (medical practice) とは臨床医学＝診療と考えて欲しい。

さて大雑把にいうと、女性に特有と考えられる医学・医療上の問題点は、以下の3点に集約されると考えられる。すなわち女性特有の身体的条件に起因する疾患、女性の生理的な事象とそれらの要因から発生する疾患、そして女性を取り巻く社会的問題によって発生すると考えられている疾患である。

第1の問題は、主として女性性器に関する疾患である。第2は、妊娠・分娩を含む主として女性のホルモンの変動に関する事柄であり、広くいえば様々な生理学的検査の正常値の違いとか、男女間で臨床的に差が見られる疾患など様々な病態が含まれることになる。第3の問題は、かなり複雑であるが、女性の社会生活一般と関連している問題である。女性の社会進出や家庭での役割、育児、子供の教育など、女性の社会的な役割が変化してきていることに関連している。これまではあまり問題にならなかったことに新しい変化が生まれてきたことは間違いがない。

もちろんこれらの事柄は、身体的にはもちろん精神的な事柄として、それぞれ微妙に関連性を持

っている。

このように医学や医療における性差に眼を向けようとするものが「性差医療＝gender specific medicine」といわれるものと理解される。前述の意味で言えば、性差医療には、「性差医学」と「性差医療」が含まれるが、このような考え方、それ自体にはとくに疑問はない。

確かに医学的には、性差という要因によって疾患の性状に違いを生むことは、なんとなく理解されていたが、実際の医療の場では、性差に十分顧慮した医療が行われていたとはいえないかもしれない。しかし多くの医療者は、男性のあるいは女性の社会的な立場を漠然とではあるが考えに入れながら診療している。同じ病気であっても患者が家庭の主婦である場合と社会で働いている女性、あるいは一家の主たる収入を稼いでいる男性の場合では違った対応をしながら診療を進めているに違いない。すなわち医学的にはgender specificであっても医療の現場では、時としてgender specificであったり、また時としてgender freeであったりするものであると考えられる。

さてここで本題である「性差医療と女性外来」を考えてみたい。「男性には女性のことは分るはずがない、ちゃんと話し相手にもなってくれない」、「女性のことは、同性である女性が一番分かっている」、「だから女性は女性が診療すべきである」といった考えが女性外来を設置する論理のようである。

このような意見は、いわゆるsuper gender freeを求める人たちが語っていることであると思うのだが、よく考えてみれば、いささか矛盾があるような気がしてならない。

男性と女性に医学的に性差がある、だからそれぞれの医療の内容は違いがあってしかるべきである、まあここまでは納得したとしても、それ故に女性の診療は「女性外来で女性が担当すべきである」果たしてそういうことになるのであろうか。

自分の経験からして、すべての女性の医療者がすべての男性の医療者よりも女性のことを理解しているとはいえないだろう。それはどちらかといえば医療者の人間性に関係しているというべきである。とすれば、「性差医療」を短絡的に「女性外

来＝女性医療者による診療体制を作る」ということで解決しようとしても結局はうまくいくはずがないと思う、揚げ足取りで悪いのだが、では「女性入院診療」は一体どうなるのだろうか。

「女性外来」は、女性の権利獲得（gender free）の一つとして政治的な課題になっているが、医療に関わる者としては、この問題を別の角度から考えてみる必要があるようだ。

例えば「医学的な性差を医療の現場でも生かすために性差医療の場を作り上げる」という方向性が求められているのであれば、まず医療者教育の

中に「gender specific medicine＝性差医学と性差医療」という分野を明確に確立することから始めなければならない。

繰り返すが、医学は「gender specific」であったとしても医療とは基本的に「gender free」であり、むしろ医療は「no gender」あるいは「neutral」である、という意識を持つことが重要であることを忘れるべきではない、というのが私の持論である。

ご批判をいただければ幸いである。

お知らせ

北海道医師会育英資金のご案内

◇総務部◇

北海道医師会では、会員または会員であった方のご子弟に奨学資金の貸付けを行っております。

この、育英資金制度の貸付者は、今日までに30余名の実績があり、すでに医学部を卒業し医療にご精励されている方もいらっしゃいます。

制度の概要を下記のとおりご案内いたしますので、ご利用を希望される方は、所属の都市医師会経由で申請願います。

記

貸付の対象となる方は？

北海道医師会会員または北海道医師会会員であった方のご子弟で、家計状況、学業成績等から見て奨学のため資金を貸付するのに適当であると思われる者。

貸付期間は？

大学医学部および医科大学在学期間中

貸付金額は？

月額5万円～10万円

なお、貸付金は無利息です。

返還期間は？

医師免許取得3年後から10年間以内に原則月割りで返済。

申込み方法は？

北海道医師会会員から所属の都市医師会を経由し、北海道医師会に申請してください。運営委員会の議を経て理事会で、申請者への貸付が決定されます。

北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記

申込先：北海道医師会事業第二課

☎060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233